第12回国際日本文学研究集会研究発表（1988.11.11）

『舞姫』のポリフォニー

Polyphony in the Text of "Maihime"

林　正子*

Mori Ogai's "Maihime," his first significant literary publication (January 1890), is a short story of no more than 41 manuscript sheets. Yet the work has remained controversial ever since its appearance and has been the object of a wealth of interpretations, ranging from the thematic, empirical, stylistic and comparative to studies of structure or applications of symbolic logic. Indeed, the work is remarkable among those of the modern period for having generated so much commentary that the history of "Maihime" criticism is now a field of research in its own right. The text remains problematical, however, and the present study seeks to identify its structural uniqueness under the category of "polyphony."

The text of "Maihime" is generated by an uneasy synthesis of the author's self-awareness and his literary ambitions, his recognition of reality, and his self-deception in confronting the text of "Maihime."

---

*HAYASHI Masako　岐阜大学講師。神戸大学大学院卒業。1984年～86年西ドイツミュンヘン大学留学。論文に「鷗外における『若きヴィーン派』翻訳の意義――シュニッツラー、ホフマンスタール、バールの翻訳作品の考察を通して――」、翻訳に「追儺」のドイツ語訳などがある。

The pattern of the author's self-recognition is mediated by the self-reflection, and fictions, of Toyotaro. In effect, we can see that in this his first published work Ogai had already worked out a conception for reflecting on his life through the act of writing.

I．序

1．百花繚乱の研究状況・今回の発表の目標

明治23年1月に発表された森鷗外の文壇処女作『舞姫』は、分量から言えば400字詰め原稿用紙41枚半という短編小説でありながら、今日に至るまで様々な読みで常に論じられ、テクスト（改稿問題）、モティーフ・成立因、主題、方法・構成、文体、比較文学的背景、記号論……といった多様な観点から究極まで論じ尽された観があり、その研究史自体が研究項目に挙げられるという、日本近代文学史上でも稀有の作品になっている。この百花繚乱の研究状況をもたらし、今後も問われ続けて行くに違いないこの作品の無尽の問題提起の要因は、やはりこのテクストの独自の構造自体に求められるであろう。今回の発表ではその『舞姫』の固有の構造を〈ポリフォニー〉として把えることの可能性を指摘したい。

2．〈ポリフォニー〉の語義と応用

「多声音楽」とか「複音楽」と訳される「ポリフォニー」という言葉の語義は「多声性の一形態を指す音楽理論用語」であり、「多声的な音楽では、音の水平的連続と垂直的結合とが横糸と縦糸のようにいわば音の織地を形作るが、このばあいに二声部以上の旋律の多かれ少なかれ独立的な横の流れに重点を置く作曲様式またはその音楽をポリフォニーという」[(1)]。この音楽形式を文芸批評の領域に導入したのが構造主義・ロシア記号論の先駆者と見做されているミハイル・バフチン（1895～1975）であり、彼は文学的言説に〈対話〉と〈独語〉の二原理を挙げ、ドストエフスキーの小説を〈対話原理〉から成

立するポリフォニー的小説と規定した[2]。今回の発表では、『舞姫』のテクストが形式上は主人公太田豊太郎による独白・手記から成り立っていながら〈独語〉に終わらず、彼自身を始めとする登場人物、さらには読者との〈対話〉を要請する構造を〈ポリフォニー〉として考察、指摘したい。ここで言う登場人物とは豊太郎によって語られ綴られる、彼と彼をめぐる人物、すなわち豊太郎自身であり、母であり、官長であり、留学生仲間であり、エリスであり、エリスの母であり、シャウムベルヒであり、相澤であり、天方伯である。これらの人物が織り成す縦糸と豊太郎の内省が横糸となって『舞姫』一篇のテクスチュアが形成されていると考えられる。

3．『舞姫』のテクスト――自己洞察と文学的野心の結合

『舞姫』の構造分析に先立って確認しておきたいことは、『舞姫』のテクストとは豊太郎の告白手記ではなく、彼の生い立ちを葛藤を懊悩を、そしてその因果関係を記す鷗人自身の執筆態度をも内包したものであるということである。鷗外自身の生の構図の認識と彼の作家としての方法意識が豊太郎の自己洞察――虚構――として『舞姫』一篇に結実したのであり、豊太郎の自己洞察とは「まことの我」に目覚めたというようなことではなく、結局〈自ら欺く〉生をしか生きられなかった認識こそ彼にとっての自己洞察の意味であり、そこに鷗外の仕組まれた生の構図が読み取れる。換言すれば、小説『舞姫』は鷗外の自己洞察と「單稗」[3]創作者としての「文学的野心」[4]の結合によって生み出されたテクストであり、作者鷗外と『舞姫』のテクストの接点に独白体手記という形式と〈自ら欺く〉生の認識があると考えられる（資料1．参照）。そして豊太郎の生が奏でる旋律とその多層的自我意識を構造化する鷗外自身の生の奏でる旋律とに作者と主人公の関係におけるポリフォニー性が指摘できる。今回の発表の主旨はこの点を踏まえた上でのテクスト分析にある。

II. 考察

1．〈自ら欺く人生〉

〈自ら欺く〉という言葉は鷗外文学にあっては、主人公の、そして鷗外自身の精神性を理解する上でのキー・ワードであり、『舞姫』では「余が幼き頃より長者の教えを守りて、学の道をたどりしも、仕の道をあゆみしも、皆な勇気ありて能くしたるにあらず、耐忍勉強の力と見えしも、皆な自ら欺き、人をさへ欺きつるにて、人のたどらせたる道を、唯だ一條にたどりしのみ」(以下、下線は発表者)というように、豊太郎の自省に用いられている。豊太郎にとっての〈欺く〉ことの意味が内へ内へと向かって追及された自己洞察が、〈自ら欺いた生〉の考察に繋がって行く営為であったわけであるが、彼によって語られた人物の相関図を見る時にもこの言葉がキー・ワードになっている。

2．〈欺き欺かれる関係〉

豊太郎を「活きたる法律」として「心のままに用ゐるべき器械」を作ろうとして洋行の命を下した官長は、「独立の思想」を抱いた豊太郎を快く思う筈がなく、留学生仲間の讒言に乗じて彼を免職に追い込むのであり、この官長は二重の意味で豊太郎を欺いている。すなわち、「余は父の遺言を守り、母の教えに従ひ、人の神童なりなど褒むるが嬉しさに怠らず学びし時より、官長の善き働き手を得たりと奨ますが喜ばしさにたゆみなく勤めし時まで、ただ所動的、器械的の人物になりて自ら悟らざりし」と回想されているように、官長は豊太郎を自分の思い通りにさせるべく「奨ま」し〈欺いていた〉のであり、ひとたび豊太郎が自分の思い通りにならないとなると、免職という処分を断行して〈欺いた〉のである。

留学生仲間は豊太郎が「倶に麦酒の杯をも挙げず、玉突きの棒をも取らぬを、かたくななる心と慾を制する力」に帰して、「かつは嘲りかつは嫉」み、果ては「猜疑」することとなり、これが豊太郎に「冤罪」を負わせ、「暫時の間に無量の艱難を閲し尽す媒」となる。彼等もまた、豊太郎を馬鹿にすると

同時に謗るという二重の意味で〈欺いた〉のであり、豊太郎を歓迎し援助の手を差し延べてくれた「普魯西の官員」とコントラストをもって描かれている。ここには〈外国〉におけるいわゆるカルチャー・ショックではなく、「同郷人」との齟齬・軋轢が重要なモティーフになっていることは彼の〈自己洞察〉の在り様と無関係ではない。ここでは人間生活を向上させてゆく際の価値観の相違が豊太郎と「同郷人」の間に見られるわけであり、〈異文化〉との葛藤が「同郷人」との間に繰り広げられているのである。

豊太郎にとって「世にまた得がたかる」べき「良友」相澤謙吉は、豊太郎が免官処分にあった時もその窮地から救った人物であるが、豊太郎とエリスとの関係を「人材を知りてのこひにあらず、慣習という一種の惰性より生じる交なり」と断言して憚らず、豊太郎の行く末を思ってのこととは言え、エリスの一件を天方伯に落着したこととして報告したことによって、逆に豊太郎を追い詰めてゆくのである。むしろ穿った眼で見ればもともと「学識あり、才能あるものが、いつまでか一少女の情にかかづらひて、目的なき生活をなすべき」と言って、豊太郎自身の立身出世への夢を再び掻き立てたのは他ならぬこの相澤であり、挙げ句は豊太郎が人事不省に陥っている時にエリスに豊太郎の帰国の約束を知らせ、彼女を「精神的に殺し」てしまう。豊太郎の才能発揮を誘導し自分の思い通りにしていったという意味においては、相澤もまた豊太郎を〈欺いていた〉のであり、エリスの存在を軽く見做したという意味において彼はエリスをも〈欺いていた〉と言えるのである。

相澤の推輓によって天方伯の仕事を手伝ううちに、「初めは伯の言葉も用事のみなりしが、後には近比故郷にありしことなどを挙げて余が意見を問ひ、折に触れては道中にて人々の失錯ありしことどもを告げて打笑ひ玉ひき」と記されている。すなわち天方伯も豊太郎の学識・才能を見て取るや、自分の傘下に繰り込むべく豊太郎への接近をはかるのであり、この天方伯に対する豊太郎の心中は「ああ、独逸に来し初めに、自ら我が本量を悟りきと思ひて、また器械的人物とはならじと誓ひしが、こは足を縛して放たれし鳥の暫し羽

を動かして自由を得たりと誇りしにはあらずや。足の糸は解くに由なし。さきにこれを操りしは、我が某省の官長にて、今この糸、あなあはれ、天方伯の手中にあり」という言葉に如実に表れている。豊太郎に帰国を勧誘する時も「滞留の余りに久しければ、様々の係累もやあらんと、相澤に問ひしに、さることなしと聞きて落居たり」と宣う。「その気色辞むべくもあらず」という豊太郎が受けた印象から、豊太郎を高く評価すると同時に自分の意の儘にしようとする天方伯の姿勢が伺われ、彼もまた豊太郎を〈欺いている〉ことが指摘できるのである。

以上の〈同郷人〉に比べて、エリスの母やエリスが踊り子として勤める「ヴィクトリア」座の座頭シャウムベルヒなどは、豊太郎との関わりから言えば副人物と規定されようが、クロステル巷の古寺の前で泣いていたエリスが豊太郎に「君は善き人なりと見ゆ。彼の如く酷くはあらじ。また我母の如く」と語ったように、シャウムベルヒはエリスの窮乏に付け込みエリスを我が物としようとしたのであり、自分の思い通りにならないとなるとエリスが妊娠し仕事を休んだことを口実に除籍してしまう。彼もまた〈欺いている〉人物と言えるのである。

エリスの母にしても、困窮に耐え兼ねて我が娘をシャウムベルヒの言いなりにしようとしたり、豊太郎が金を持っていることを知ると「慇懃」に扱ったりする人物として語られ、豊太郎が免官された時エリスがそのことを母に内緒にするように言った理由は「こは母の余が学資を失ひしを知りて余を疎んぜんを恐れてなり」と記され、実に娘にこのように見做されている母は、最後に「パラノイア」のエリスを「微かなる生計を営むに足るほどの資本」と共に託され、その「資本」の故か否か、「あはれなる狂女の胎内に遺しし子の生れむをりのことをも頼み置きぬ」という豊太郎の依頼を受け入れる人物として存在するのみである。

これらの人物に対して、豊太郎の母は「厳しき庭の訓」によって「一人子」の豊太郎を常に「一級の首」に記される「神童」として育て上げ、その「心

は慰みけらし」と記されている。我が子を「活きたる辞書」となしているこの母に対して「辞書たらむはなほ堪ふべけれど、法律たらんは忍ぶべからず」というように、官長とは同列に置かれてはいないものの、息子を自らの思い通りに育て大成させようとした母に対して、一旦「まことの我」に身覚めた豊太郎の心にわだかまりが全くなかったとは断言できまい。「余は父の遺言を守り、母の教に従ひ、人の神童なりなど褒むるが嬉しさに怠らず学びし時より、官長の善き働き手を得たりと奨ますが喜ばしさにたゆみなく勤めし時まで、ただ所動的、器械的の人物になりて自ら悟らざりし」という言葉の中に、母に対するわだかまりを読むのは穿っているだろうか。母は無自覚にしろ豊太郎を自分の理想どおりに育てようとしたという意味において彼を〈欺いていた〉と考えられるのである。

以上、『舞姫』において豊太郎に回想され語られ綴られる、豊太郎自身とエリス以外の人物が、豊太郎をそしてエリスを〈欺く〉様相――〈欺き欺かれる関係〉を挙げた。もちろんのことながら、ここで豊太郎ばかりが欺かれていたのではなく「人をさへ欺きつるにて」とあったように彼自身がこれらの人々を欺いていたことを確認しておかなければならない。母や官長に対しては「我ならぬ我」ゆえとは言いながら彼等の敷いた立身出世のレールに乗って来たこと、そうでありながら、その期待を裏切ったという意味において。留学生仲間に対して「彼人々の嘲るはさることなり。されど嫉むはおろかならずや。この弱くふびんなる心を」と記したり、新聞社通信員となった自分の知識は「総括的」になって「同郷の留学生などの大かたは、夢にも知らぬ境地に至りぬ。彼等の仲間には独逸新聞の社説をだに善くはえ読まぬがあるに」と綴っており、自らの脆弱さを自嘲していると同時にそのような彼等を謗る、あるいは逆に馬鹿にするという意味において。相澤に対してはエリスとの関係について諭された折、「わが弱き心には思ひ定めんよしなかりしが、姑く友の言に従ひて、この情縁を断たんと約しき」とあるように潔い決断のないまま優柔不断に約束をしておきながらエリスとの訣別を自らは断行でき

なかったという意味において、そしてそうでありながら逆に相澤を「憎むこころ」を抱くことにおいて。天方伯に対しては露骨でないにしてもその絶対的権威を描き、自らがその「手中」に掌握されてゆく姿を描くをいう無垢な忠臣でない精神性を有するという意味において。エリスの母やシャウムベルヒに対してはエリスを彼等の思い通りにさせなかったという意味において。豊太郎自身が彼をめぐる人々を〈欺いていた〉と言えるのであり、ここに至って〈欺き欺かれる関係〉を指摘することが可能であろう。

豊太郎の自己洞察が一人称独白体を以て語られてゆくが故に、一見、モノフォニーのような印象を与えるこのテクストには、それぞれの人物との間で繰り広げられる〈欺き欺かれる関係〉が豊太郎の語りの中から浮き彫りにされ、この葛藤がそれぞれ独立した旋律でありながら、豊太郎とエリスをめぐる〈欺き欺かれる関係〉として全体的な和声を形成し、多声的な世界を達成していると言えないだろうか。しかもその語りの位相は、後に述べるように、決して平面的に閉じられたものではなく、豊太郎という人物の生の必然性という一つの宇宙を開いて見せるのである。

3．エリスのレゾン・デートルと『舞姫』というタイトル

豊太郎が欺いたのは「自ら」と「人」をだけでない。相澤に豊太郎の「約束」を聞かされた時、エリスは「俄に座より躍り上がり、面色さながら土の如く、『我豊太郎ぬし、かくまでに我をば欺き玉ひしか』と叫び、その場に僵れぬ」。『舞姫』における〈欺く〉という直接の言葉三例がいずれも豊太郎の行為として描かれていたのは偶然ではなく、豊太郎がエリスを〈欺いた〉ことは、他の〈欺き欺かれる関係〉を統合する主旋律であると考えられる。それではエリス自身は一体どのような〈欺き〉を為したのであろうか。唯一点のエリスの〈欺き〉があるとするならば、それは豊太郎と初めて出会った時の「人に否とはいはせぬ媚態」にあると言えよう。もっともこれはエリスの〈欺き〉と言うより豊太郎の心の反射作用とでも言った方が相応しいかもしれないが、いずれにしてもエリスは豊太郎の眼を〈欺いた〉のである。

「舞姫」という言葉はテクストには二度用いられている。最初は、豊太郎に窮乏を救って貰ったエリスが豊太郎のもとを訪ねるようになった場面で、「この時を始めとして、余と少女との交漸く繁くなりもて行きて、同郷人にさへ知られぬれば、彼らは速了にも、余を以て色を舞姫の群に漁するものとしたり」である。もう一例はエリス個人のことから始めて、「舞姫」という職業に就いた女性の一般的な身の上を綴った箇所で、「彼（エリス）は父の貧しきがために、充分なる教育を受けず、十五の時舞の師のつのりに応じて、この恥ずかしき業を教へられ、『クルズス』果てて後、『キクトリア』座に出でて、今は場中第二の地位を占めたり。されど詩人ハックレンデルが当世の奴隷といひし如く、はかなきは舞姫の身の上なり。薄き給金にて繋がれ、昼の温習、夜の舞台と緊しく使はれ、芝居の化粧部屋に入りてこそ紅粉をも装い、美しき衣をも纏へ、場外にてはひとり身の衣食も足らずがちなれば、親腹からを養ふものはその辛苦奈何ぞや。されば彼らの仲間にて、賤しき限りなる業に堕ちぬは稀なりとぞいふなる」というものである。この二箇所の「舞姫」に関する叙述の共通点は、その語感から浮かぶ優雅なイメージのものではなく、一歩間違えば色を売らねばならぬ賤業として描いていることであり、豊太郎自身もこの舞姫観に囚われていたと思われる点である。第一例の直後には「われら二人の間にはまだ痴駭なる歓楽のみ存じたりしを」と続けられているし、第二例の直後には「余とエリスとの交際は、この時までは余所目に見るより清白なりき」とあり、豊太郎はエリス個人に対しては偏見は持たなくともエリスの職業に対しては非常に予防線を張って自己弁護しているように思われる。少なくともこのテクストから読み取れる豊太郎の「舞姫」観からは、清純なエリスの面影を悔恨の情と共に抱き続ける豊太郎の心中がこの題名を要請したとは言いがたい。それでは、何故にこの小説は「舞姫」と命名されたのであろうか。

エリスの出現は豊太郎にとってはそれまでの「我ならぬ我」を「まことの我」が攻め始めた折であった。すなわち、それまでの「所動的、機械的」な

〈自ら欺いた生き方〉を悟り、政治家や法律家になるべく母や官長の敷いたレールを驀進することをやめ、自らの嗜好と意志で以て選択した方向、たとえば歴史文学や哲学への興味・関心が高まり、その方向へと歩み始めた頃エリスに出会ったのである。その漸層法的に高められた自己洞察の契機を検討する時、この邂逅の時期は豊太郎自身の生き方を照射し、まさにエリスの存在が豊太郎の試金石の集大成となっているとも言えよう。

「本篇の主とする所は太田の懺悔に在りて、舞姫は実に此の懺悔によりて生じたる陪賓なり。然るに本篇題して舞姫と云ふ。豈に不穏当の表題にあらずや」[5]と石橋忍月はエリスの「陪賓」なるが故に「舞姫」という題名の不適当なることを述べているわけであるが、この「陪賓」が〈主賓〉共々奏でる管弦楽が織り成す多声的世界が『舞姫』のテクストであり、この「陪賓」をめぐって他の〈賓客〉と〈主賓〉の〈欺き欺かれる関係〉が展開されたことを念頭に置くとき、「舞姫」はそのポリフォニー構造を実現する題名として把えられるのである。

III. 結び

1.〈欺き欺かれる関係〉を記す豊太郎の語りの位相と〈今日〉の意味

今回の発表では主人公太田豊太郎の自己洞察が横糸になり、登場人物の〈欺き欺かれる関係〉が縦糸となって『舞姫』という織地が織り込まれてゆくポリフォニー構造を論じたかったのであるが〈欺き欺かれる関係〉を記す際の豊太郎の語りの位相を最後に確認しておきたい。母・官長・留学生仲間・シャウムベルヒとの関係性が豊太郎によって既に相対化されて語られていたのに対し、エリス・相澤・天方伯・エリスの母はその行為の意味を永遠に問われ続ける史的現在の行為者としても記され、豊太郎はその双方の領域を行きつ戻りつしながら従来の生き方をめぐる自己認識と〈今日〉の自己の現実の生を語る（資料2．参照）。「ああ、相澤謙吉が如き良友は世にまた得がたかるべし。されど我脳裡に一点の彼を憎むこころ今日までも残れりけり」と

いうクライマックスを奏でる結語はテクストをポリフォニックに開く終結であると同時に端緒である。すなわちこの〈今日〉は豊太郎がセイゴンの港でこの手記を記した今日であること、森鷗外が小説『舞姫』を執筆した今日であることを包括した、われわれがこのテクストを読む〈今日〉であるという構造を指示しており、開かれたテクストとしての面目を発揮する。

2．〈まなざしのドラマ〉――「一隻の眼孔」

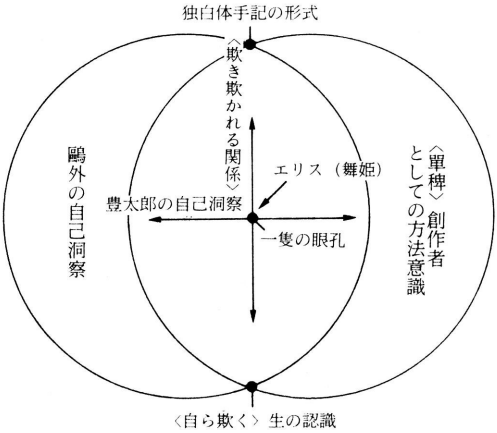
『舞姫』における〈まなざしのドラマ〉を小森陽一氏は「エリスとのまなざしの交叉についての記述は、手記執筆時の豊太郎にとっては、一つの自己創造の試み」であり、「自分と彼女との間で、間主観的に共軛された自己像を獲得」[(6)]したと論じたが、この卓抜な提言はエリスのみならず、史的現在の行為者として描かれた人物すべてに適用される関係性ではなかったか。「人の見るが厭はしさに」・「余所目に見るより」・「知らぬ人は何とか見けん」・「怪み見送る人もあるべし」という具合に、さらにそれは往来を行く人々、カフェの客、あるいは「彼（エリス）が一声叫びて我頸を抱きしを見て馭丁は呆れたる面もちにて、何やらむ髭の内にていひしが聞こえず」とある馭丁ら、いわゆる〈異文化〉を有する世間の人々にまで敷衍され、彼等に〈見られる〉ことによって豊太郎は「自己像を獲得」し、その自己像を洞察することになるのである。豊太郎が「自由なる大学」で獲得した「一隻の眼孔」が文化を異にする人間関係の〈欺き欺かれる関係性〉を穿つものとしてテクスト中には仕組まれていたのである。

3．『舞姫』のポリフォニー性

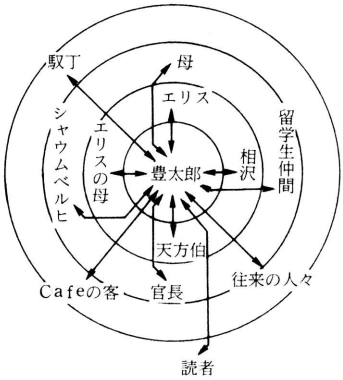
小説『舞姫』は森鷗外の自己洞察と彼の「單稗」創作者としての文学的野心の結合によって生み出されたテクストであり、作者鷗外と『舞姫』のテクストの接点に独白体手記という形式と〈自ら欺く〉生の認識があると考えられる。その土壌から成立した『舞姫』というテクストの生地は、豊太郎の〈見、見られる関係〉によって獲得された自己像を考察するという自己洞察を横糸とし、豊太郎の「一隻の眼孔」によって、豊太郎・エリスを始めとする

豊太郎の母・官長・留学生仲間・相澤謙吉・天方伯・エリスの母・シャウムベルヒらすべての登場人物によって繰り広げられる〈欺き欺かれる関係〉が縦糸となって織り上げられた文様であると言えよう。今回の発表ではその縦糸の部分を照射し、〈対話〉を要請する深層テクストが、豊太郎の独白という表層テクストの背後に厳然と存在し自己増殖を遂げる構造にアプローチすることに努めた。このポリフォニー性は豊太郎自身の内部に生きる自他の主体間の〈対話〉を更に生み続け、開かれたテクストとして読者に訴え続ける多声性を持ち続けることを確認して今回の発表を閉じたい。

資料1　『舞姫』の構造



資料2　〈欺き欺かれる関係〉
‖
「まなざしのドラマ」



注

(1) 平凡社版『音楽事典』第4巻（昭35．2）

(2) Mikhail Mikhailovichi Bakhtin：“Problemi poetiki Dostoiefskovo” 邦訳『ドフトエフスキー論』（新谷敬三郎訳　冬樹社）

(3) 鷗外は明治22年11月に発表した「現代諸家の小説論を読む」において短編小説を「單稗」という用語で表現したが、この概念はパウル・ハイゼとヘルマン・クル

ツ編の『ドイツ短編集』(Deutscher Novellenschatz. herausgegeben von Paul Heyse und Hermann Kurz. München, Oldenbourg, 1871) のうちハイゼの序文から強い影響を受けたことが小堀桂一郎氏の大著『若き日の森鷗外』(昭44.10　東京大学出版会) 第三部「文学観の系譜」に明らかにされている。

(4) 前掲「若き日の森鷗外」第四部「三つの創作」第一章「舞姫」

(5)「國民之友」第六巻第七十二号 (明23. 2)。署名は「氣取半之丞」。

(6)「結末からの物語――『舞姫』における一人称――」『文体としての物語』(昭63. 4 筑摩書房) 所収。原題「『舞姫』試論」(「成城国文学論集」昭59. 6)

[付記]

「会議録」のテクスト引用は岩波書店版『鷗外全集』第一巻 (昭46.11) により、適宜、新字体に改めた。尚、発表時間の都合上、先人の諸説紹介を省略せざるを得なかった。論証不足の点もあると思うが、今回の研究発表に関連して同題の拙稿(「岐阜大学国語国文学」第19号　1989. 2) を併せてお読みいただければ幸いである。

討議要旨

谷学謙氏より「母とか上官たちは、豊太郎とは考え方、認識が違うのであって、別にだましたわけではない。欺いたというふうには言えないのではないか」との疑問が出された。発表者は「欺く」という言葉をもう少し広く、「自分の価値感で相手を誘導していく」という意味で使ったのだ、と答えられた。

松本鶴雄氏より、資料2について、近代小説の登場人物ならこういった関係をとるのはあたりまえで、これを「まなざしのドラマ」として「舞姫」の特徴とみるのは、無理があるのではないか、という意見が述べられた。発表者は「他者によってどう見られているか、ということを契機にして豊太郎は自己像を獲得し、その自己像を洞察することになるのである。その点は豊太郎の自己洞察の在り様として確認すべきだと考える」と述べられた。